The Japanese Society of Pharmacognosy

生 藥 学 雑 誌
Shoyakugaku Zasshi
37(4), 351~360 (1983)

Clematis 属植物とその関連生薬の研究（第6報）[1]
「威霊仙」の本草学的考察（1）[2]

御影雅幸，難波恒雄*
富山医科薬科大学和漢薬研究所

Pharmacognostical Studies on the *Clematis* Plants and Related Crude Drugs (VI)[1]
Herbological Studies on "Wei-ling-xian" (1)[2]

MASAYUKI MIKAGE and TSUNEO NAMBA*

Research Institute for Wakan-yaku, Toyama Medical and Pharmaceutical University, 2630, Sugitani, Toyama

(Received March 28, 1983)

The chinese crude drug "Weilingxian" has been used mainly as diuretic and antirheumatic remedies.

There are various kinds of "Weilingxian" in the present markets, the botanical origins of the crude drugs are complicated. The first herbological description on "Weilingxian" appeared in "Kai Bao Ben Cao" (開宝本草) written in the Song (宋) dynasty of China. The complication in the botanical origin of "Weilingxian" is supposed to exist from old time. Though it has been regarded that the first botanical origin of "Weilingxian" was *Veronicastrum sibiricum* (L.) PENNELL of Scrophulariaceae, it remained unexplained. Through our herbological study, it was estimated that the first botanical origin of "Weilingxian" had might be the *Clematis* plant of Ranunculaceae, especially the species in Sect. *Tessen* of the genus.

Keywords——botanical origin; Weilingxian; Clematis; herbological study; Chinese crude drug

漢薬「威霊仙」は祛風湿薬として，おもに神経痛やリウマチなどの治療に用いられる薬物である[3]．威霊仙は『開宝本草』[4]に初めて収載された薬物であるが，早い時期から基源の混乱が認められ，現在中国においても各地で多種基源の威霊仙が使用されている[5]．現在各国市場に出廻っている威霊仙の主たる基源はキンポウゲ科の *Clematis* 属植物の地下部であるが[6]，謝宗万[7]や李家実ら[8]の市場調査によると，*Clematis* 属植物以外にもユリ科の *Smilax* 属植物，センリョウ科の *Chloranthus* (*Sarcandra*) 属植物，キク科の *Ainsliaea* 属および *Inula* 属植物などの地下部が威霊仙として市販されているとしている．また *Clematis* 属植物は東亜に多くの種が分布し，しかも形態の類似したものが多いことから，威霊仙として使用されるものは多種にわたっている[6~8]．

そこで威霊仙の古来の正品および基源植物の変遷を明確にする目的で，古来の本草文献を考察し，また現在までに著者らが行った市場調査結果[6,9]および先人の市場調査結果[7,8,10]などに基づき，本草学的考証を行った．本報では威霊仙の古来の正品について報告する．

本　　論

I. 従来の論説とそれらに対する考察

威霊仙の古来の正品について最も一般的な説は，ゴマノハグサ科の *Veronicastrum sibiricum* (L.) PENNELL (= *Veronica sibirica* L.) クガイソウであるとする説である．本草学的には李ら[8]が考察し，宋代の威霊仙はクガイソウであったとし，また謝[7]も「玄参科 "草本威霊仙 *Veronica sibirica* L." 是古代本草応用最早而流伝最久的薬物」と述べ，クガイソウが最も早く伝えられた威霊仙であるとしている．わが国でも貝原益軒[11]は「九蓋草ト和俗名ツク」，岡本一抱[12]は「今ノ九蓋草ト云フ者，是レ威霊仙ナリ」，松岡玄達[13]は「和漢共ニアリ漢ヲ上トス，所謂鐵脚威霊仙

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Pharmacognosy

是レナリ，和ノ九蓋草是ナリ」と述べ，威霊仙はクガイソウであるとしている．これらの意見は明らかに『図経本草』[4] の附図および文章 (Fig. 1, 2) から考察されたものと考えられるが，牧野[14] や石戸谷[10a] が反対しているごとく，この意見には種々の矛盾点が考えられる．しかし，現在までに威霊仙の正品としてクガイソウ以外の植物が発表されたことはなく，本説が現在においても通説となっている．

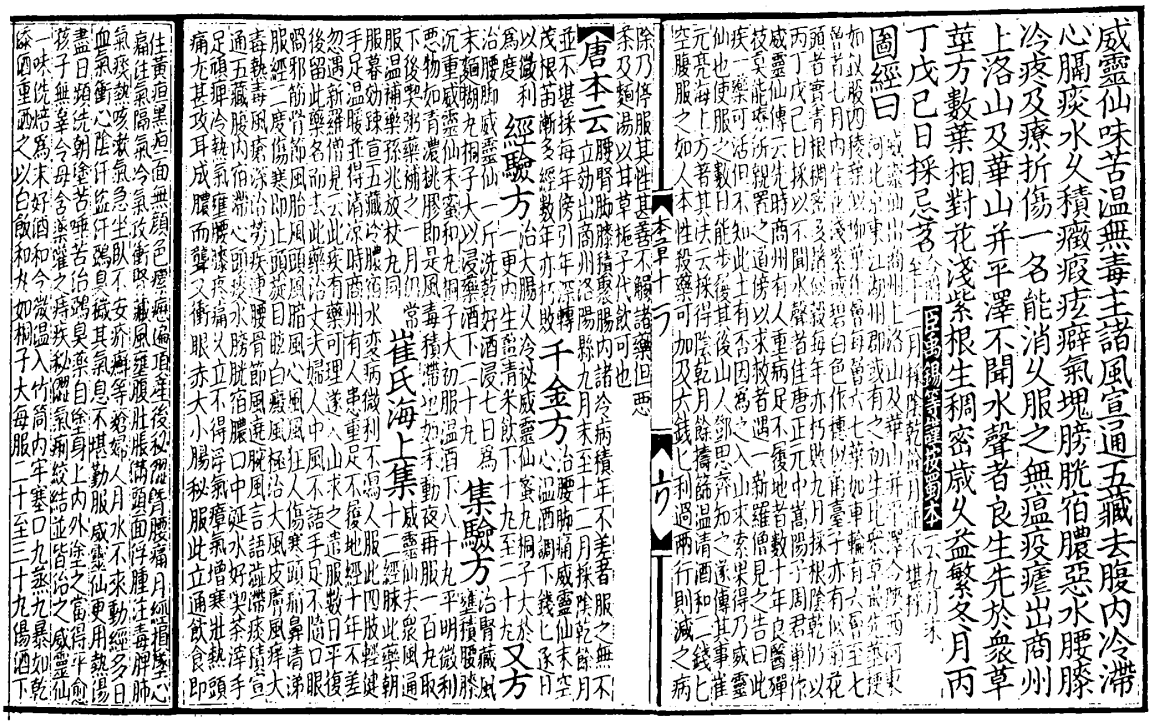
以下，威霊仙の古来の正品がクガイソウであることの矛盾点を示す．

1. 『開宝本草』[4] における威霊仙に関する植物学的な記文 (Fig. 1) の内，「茎方」の一文は成長して花を咲かせるようになったクガイソウには合致しない．クガイソウの茎の断面 (Fig. 3-A) は明らかに類円形である．また生育地については「平沢」に生ずと記され，クガイソウの生育環境が山間部の路傍あるいは草原であることに矛盾し，もしクガイソウを記載したとするなら同書中の他の植物記載から察するに，「山谷に生ず」とされたであろう．

2. 『崔氏海上集』[4] (正名は崔玄亮著の『海上集験方』10巻[15]) によると，威霊仙は新羅の一僧により中国の商州 (今の陝西省南東部)[16] に伝えられたとされている．ゆえに威霊仙は元来朝鮮半島で使用されていた薬物であることがうかがえるが，現在の朝鮮半島で産出される威霊仙はすべてキンポウゲ科の *Clematis* 属植物基源のもので[6c]，クガイソウは朝鮮半島では Naeng cho (冷草) の名称で民間的に全草が感冒に使用されている[10d,17]．一方，現代中国においては北部地方の各省でクガイソウが薬用に供されているが，その中で本種を威霊仙の名称で使用するとされるのは山東省のみである[5e]．ただし同省でも本種が本草正品であるか否かは疑問視しており，実際このものが使用されているかどうかも疑問である．クガイソウは内蒙古自治区[5d]，山西省[5h] などでは「斬竜剣」，陝西省[5i] では「秤杆升麻」の名称で使用されており，ともに薬用部は全草で，用途は湿性腰腿痛，感冒による諸症，膀胱炎，毒蛇咬傷，毒虫さされなどであり，威霊仙の古来の薬効よりも多様である．石戸谷[10a,b] や謝[7] らによる市場調査においてもクガイソウ基源の威霊仙は確認されておらず，現在クガイソウを基源として使用されている薬物は，元来威霊仙とは別の独立した薬物であろう．また『図経本草』を除いては本草文献的にもクガイソウを使用したと思われる形跡がなく，過去においてもクガイソウ基源の威霊仙は使用されていなかったか，あるいはごく限られた地域で，ごく限られた期間のみ，それも正品の代用品として使用されていたものと考えられる．『図経本草』の内容に対する考察は後述する．

3. 通常，薬物の基源が変化すると，それに伴って薬効も変化するものであるが[18]，威霊仙の祛風湿薬としての薬効は古来変化していない (TABLE I)．このことからも威霊仙の基源植物がクガイソウから現在の *Clematis* 属植物へと変化したとは考え難い．

4. 日本へ威霊仙の知識がもたらされたのは，おそらく『太平恵民和剤局方』[19] の導入と同時期と考えられる．それよりも以前に新羅から直接渡来したことも考えられるが，その形跡は認められず，わが国で威霊仙が使用され始め


威霊仙味苦温無毒主諸風宣通五藏去腹内冷滞心膈痰水久積癥瘕痃癖氣塊膀胱宿膿惡水腰膝冷疼及療折傷一名能消久服之無瘟疫瘧出商州上洛山及華山并平澤不聞水聲者良生先於衆草華方數葉相對花淺紫根生稠密歳久益繁冬月丙丁戊己日採忌茗

圖經曰

唐本云腰腎脚膝積聚腸内諸冷病積年不差者服之無不

崔氏海上集

Fig. 1. 『大観本草』の記文

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Pharmacognosy

Fig. 2. 『証類本草』の図

TABLE I. 主たる本草書および医方書にみられる「威霊仙」の薬能

証類本草引用書[4]	
崔氏海上集（唐）	去衆風通十二経脈…疎宜五藏冷膿宿水変病微利不瀉人服此四肢軽健手足温暖並得清涼
唐本（唐？）	腰腎脚膝積聚腸内諸冷病積年不差者
千金方（唐？）	治腰脚痛
開宝本草[4]（宋）	主諸風宜通五藏去腹内冷帯心膈痰水久積癥瘕痃癖気塊膀胱宿膿悪水腰膝冷疼及療折傷
本草衍義[44]（宋）	治腸風
湯液本草[45]（金）	主諸風湿冷通五藏去腹内瘕滞腰膝冷痛及治傷損…去大腸之風
丹渓心法[45]（元）	治腰腿湿痛
本草品彙精要[46]（明）	主風湿疼痛
本草蒙筌[47]（明）	為諸風湿冷痛要薬也
本草綱目[35]（明）	風湿痰飲之病
本草従新[48]（清）	治中風痛風頭風頑痺癥瘕積聚痰水宿膿黄疸浮腫大小腸秘風湿痰気一切冷痛…諸骨哽
本草求真[49]（清）	誠風薬中之善走者也

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Pharmacognosy

るのはおそらく12世紀に入ってからのことであろう．当時は中国からの輸入品が使用されていたであろうが，『和剤局方』と同時期に輸入された『証類本草』[4]には明らかにクガイソウと思われる図が載せられており（Fig. 2），もし当時輸入されていた威霊仙がクガイソウであったなら，わが国にも山野にかなり普遍的に分布し，かつ目立ちやすい本種を見逃すことは考え難く，国産品も利用されたに違いない．しかし17世紀に至るまでわが国でクガイソウを実際に用いたような記録はなく，当時中国から輸入された威霊仙はクガイソウの地下部とはかなり形態の異ったものであったと考えられる．

5. 新羅僧が威霊仙を実際に採集し伝承したとされる今の陝西省商県には，現在クガイソウは分布しないとされている[20]．また『証類本草』[4]に引用された『唐本』には「出商州洛陽県」とあり，洛陽すなわち今の河南省洛陽近辺[16]にもクガイソウの分布は知られていない．

6. 岡本一抱[12]は「和人ハ徐長卿及仙人草ヲ以テ威霊仙トス．尤トモ非也．今ノ九蓋草ト云ノ者是レ威霊仙ナリ，然レドモ惟タ唐ヲ用テ宜トス」と述べており，この文章からクガイソウを正品としながらも実際にはクガイソウは威霊仙としては用いられておらず，当時（17世紀末）の中国からの輸入品もクガイソウ基源のものではなく，また徐長卿（ガガイモ科の *Cynanchum* sp. の地下部）でも仙人草（*Clematis terniflora* DC. var. *robusta* (CARR.) TAMURA センニンソウ）でもなかったことが窺える．

II. 「威霊仙」の古来の正品について

前述のごとく，威霊仙の古来の正品がクガイソウであったとする意見には賛成し難い．そこで現市場の威霊仙の主たる基源植物が *Clematis* 属植物であるので，*Clematis* 属植物と *Veronicastrum* 属植物，とくにクガイソウ[21]について本草考証を行った．

1. 『開宝本草』[4]中の威霊仙に関する植物学的な記文（Fig. 1）の内，「生先於衆草」からはクガイソウとも *Clematis* 属植物とも判断できない．「茎方」については前述のごとくクガイソウには一致しないが，*Clematis* 属植物とくにテッセン節（sect. *Tessen*）植物[22]には明りょうな6稜があり，一見して方形に見える（Fig. 3-B）．「数葉相対」という言葉は輪生ではなく，数葉からなる複葉が対生していると解釈でき，*Clematis* 属植物によく合致する．「花浅紫」については結論の項で詳説するが，クガイソウでは紅紫色～淡紫色[20]，テッセン節植物では *C. florida* THUNB. テッセンが白色，*C. patens* MORR. et DECNE. カザグルマが淡紫色～白色，*C. cadmia* BUCH.-HAM. ex WALL. では淡紫色である[23]．「根生稠密歳久益繁」についてはクガイソウと *Clematis* 属植物に共通する．また生育地について「平沢」に生ずとあり，これはテッセン節植物が湿地を好んで生えることによく合致する．

以上のごとく，『開宝本草』の記文はクガイソウであることには矛盾があるが，*Clematis* 属植物であることを否定する内容はない．

2. 『証類本草』[4]に「唐本云…」として引用された文章（Fig. 1）の内，「毎年傍引年深轉茂根苗漸多經数年亦朽[24]敗」の一文は *Clematis* 属植物によく一致し，とくに数年して地上部が突然枯死することはテッセン節植物を栽培していてしばしば経験される．

3. 『多識編』[25]に「威霊仙俗云布那波良誤」，『本草辨疑』[26]に「俗ニ云布那波羅誤レリ」，『和語本草綱目』[12]には「和人ハ徐長卿及ヒ仙人草ヲ以テ威霊仙トス」と記されている．このことから察するに，当初中国からわが国へ輸入された威霊仙に対して，当時の本草家が和産として最初に充てた植物はクガイソウではなく「フナバラ」すなわちガガイモ科の *Cynanchum* 属植物であったようである[27]．前述のごとくもし当時（宋代）の威霊仙がクガイソウであったなら，当然同植物が見つけ出されたはずである．クガイソウの根とフナバラソウ[27]の根の形態を比較すると，前者には細根が多く，また根毛が多く，外面の色が灰黒色であるのに比して，後者は細根少く，表面は平滑で，外面の色は淡黄色であるなどの点でかなり異ったものである．一方，テッセン節植物の根は形はフナバラソウの根に類似し，色も淡かっ色～橙黄色で，クガイソウよりははるかにフナバラソウの根に似たものであり，中国で宋代に使用され，わが国へ輸入された威霊仙がテッセン節植物であったとしても矛盾はない．ただ香気がかなり異なるので，『多識編』[25]などに記されている（前出）ごとく，当時の人々もフナバラソウとは同一でないことは察知していたようである．

フナバラソウは『馬医絵巻』[28]にみられ，鎌倉時代すでに馬用の薬物として使用されており，また『大同類聚方』[30]にも「久呂久佐」の名で収載されており，わが国では古くから知られていた薬用植物である．中国から輸入された威霊仙は，当時知られていた日本産生薬の中ではこのフナバラソウ基源のものに最も良く似ていたのであろう．

4. 『花鏡』[31]に「鐵線蓮一名番蓮或云即威霊仙也」と記され，鐵線蓮はテッセン節植物と思われることから（後述），明代末から清代初期の頃（16～17世紀）の中国でテッセン節植物が威霊仙として使用されていたことがうかがえる．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Pharmacognosy

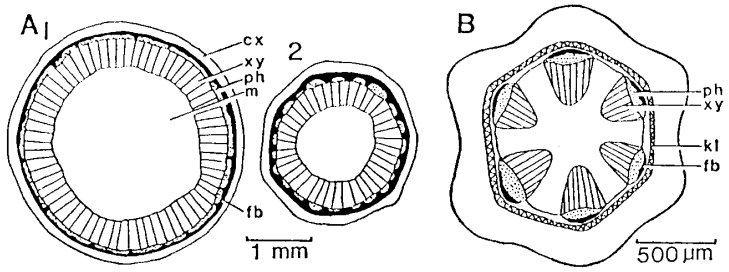


Fig. 3. Diagram Illustrating Transverse Sections of the Stems.
A: *Veronicastrum sibiricum* (1, middle part; 2, upper part).
B: *Clematis patens*

5. 李時珍[32]が引用した『図経本草』中に「生花六出」の一文がある．これに対して北村[14]は「ヤマカシュウ *Smilaxs ieboldii* MIQ. は陝西省にも分布し，花弁は6枚である」と参考意見を述べているが，この一文はテッセン節植物を記したとする方が受け入れやすい．李時珍は威霊仙として *Clematis* 基源のものを述べており（次報で詳説する），もし李時珍自らがこの「六出」の一文を本来の『図経本草』の文章に付したとしても，*Smilax* の花を記したとは考え難く，またもしそのことが李時珍が引用した『図経本草』あるいはその引用書に記されていたとしても，小さくて目立たない同植物の花弁を記したとは思えない．いずれにせよこれはテッセンを始めとするテッセン節植物の6枚の花弁（植物学的には花被）を記したものと考えられる．なおこの一文の他にも「初生作蔓」の文が付加されており，これもテッセン節植物によく一致するものである．

以上考察したごとく，威霊仙の古来の正品がクガイソウであることには矛盾が多いが，*Clematis* 属植物であることを否定する要素はなく，威霊仙の古来の正品はキンポウゲ科の *Clematis* 属植物，とくにテッセン節 (Sect. *Tessen*) 植物であったと考証しうる．

III. 『図経本草』の内容に関する考察

牧野[14]は，後人が威霊仙の正品にクガイソウをあてたのは『図経本草』の粗雑な記載文であると述べ，石井[10a]は粗漫なる絵図がその因であるとしている．現世の植物中に『図経本草』[4]の記文に合致する植物は認められない．これは複数の植物を混記したためと考えられる．『図経本草』中の植物学的な記載を解析した結果は次のようである．「威霊仙出商州上洛山及華山幷平沢今陝西河東河北京東江湖州郡有之初生比衆草最先茎梗如釵股四稜葉似柳葉作層毎層六七葉如車輪有六層至七層者七月内生花浅紫或碧白色作穂似莆台子亦有似菊花頭者実青根稠密多鬚似穀毎年亦朽敗」の記文で下線部以外の部分は『開宝本草』と同文である．示された産地の中で，「陝西，河東，河北」の地にはクガイソウが分布しているが（ただし陝西省南部には分布しない），「京東，江湖州」には分布しない (Fig. 4)[20]．すなわち前者の地はクガイソウの分布を示したもので，後者はテッセン節植物の分布域によく合致する (Fig. 4)．茎の形状に関して，「釵股」はカンザシの股のことであるが，これは茎の上部で分枝したクガイソウの花穂のことを示したものと思えるが，テッセン節植物の果実期はまたカンザシそのものに酷似したものである[23]．「四稜」は『開宝本草』の「茎方」を蘇頌が改変したもので，前述のごとく少なくともクガイソウには合致しない．「葉似柳葉…六層至七層者」は明らかにクガイソウを記したものである．花期について，「七月」は中国暦であるから，これは現在の8月頃であって，クガイソウの花期7～9月[20]に合致する．花色についてはクガイソウに合致するが，テッセン節植物の中にも淡紫色のものがある．「作穂似莆台子」はクガイソウについての記事である．「亦有似菊花頭者」はテッセン節植物の花被が通常6～8枚で大型である様子を記したものと考えられ，あるいは八重咲種(*Clematis florida* THUNB. var. *plena* D. DON)[23]のことを述べたのかも知れない．いずれにせよクガイソウではない．実の色については双方に合致せず不明，おそらくまったく別植物を記したものであろう．根に関して，「多鬚似穀」はクガイソウにより適合する．「毎年亦朽敗」はクガイソウ，テッセン節植物ともに合致する．

次に『図経本草』の図であるが，4種はすべてクガイソウに類したものである (Fig. 2)．ところでこの4種の産地であるが，『大観本草』[4a]では「商州」，「晉州」，「石州」，「寧化軍」となっており (Fig. 2)，商州以外はすべて今の山西省である．また『政和本草』[4b]や『紹興本草』[4c]では『大観本草』で「商州」とされているものに「幷州」と記されている．『政和本草』は出版に際して原本にあたって『大観本草』を校正していること，『紹興本草』にも同名で記されていること，クガイソウが商州に分布しないことなどを考慮すると，『大観本草』の「商州」は「幷州」の誤りと思われ，恐らく翻刻が重ねられる内に威霊仙の本来の産地である「商州」に書き替えられたのであろう．「商州」

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Pharmacognosy

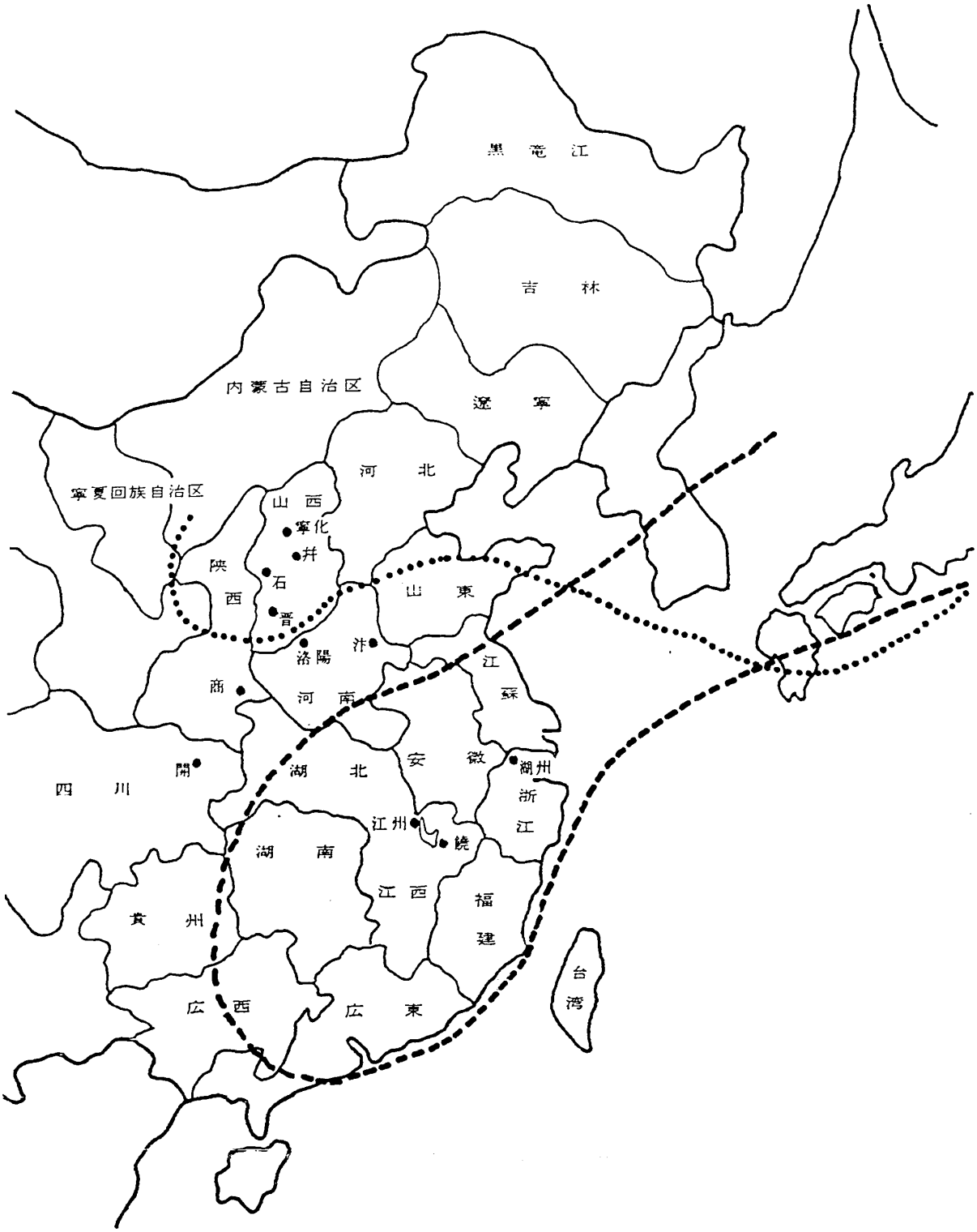


Fig. 4. 歴史上の地と2種の植物分布

------ *Clematis* Sect. *Tessen* 分布域, ····· *Veronicastrum sibiricum* 南限

が「井州」の誤りとすると，『図経本草』の4種の図の産地はすべて今の山西省ということになる（Fig. 4）．山西省にはクガイソウは多く分布しているが，テッセン節植物の分布はないようである[23]．山西省の山地で威霊仙を探し求めた人が，『開宝本草』の「数葉相対花浅紫」の一文を根拠にクガイソウにあてたものと考えられる．また図を詳細に検討すると，地上部の形態が最もクガイソウに似ているものは「寧化軍」のものであるが，根はまったく異なり，かえってテッセン節植物の倒伏した茎から発根している状態に酷似しており，明らかに地上部と地下部を合成した図である．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Pharmacognosy

以上，『図経本草』の記載は文章，附図ともにテッセン類とクガイソウ，さらには他の植物を混記したものと判断される．このことは蘇頌が入手した資料がすべて山西省というごく限られた地域からの威霊仙であったために生じたと考えられ，前述のごとくクガイソウはテッセン節植物が分布しない山西省における代用品であり，また以後クガイソウが威霊仙として使用された形跡もないことから，ごく短期間の使用であったと考えられる．おそらく期待される薬効が得られなかったのであろう．

ただし，『図経本草』[4]の「本経外草類下」の中に「鐵線」と称される薬物が収載されており，「鐵線生饒州味微苦無毒三月採根陰乾彼土人用療風消腫毒有効」と記されている．このものの図（Fig. 2）はその葉の形状や産地（饒州は今の江西省鄱陽県[16]）から察して，テッセン節植物を描いたものと思われ，とくに *C. florida* THUNB. テッセンに似ている．薬効の「療風消腫毒」は威霊仙に類するもので，また饒州は『図経本草』で新しく加えられた威霊仙の産地「江州」に隣接する地であることから（Fig. 4），本植物が威霊仙として出荷されていたことも考えられる．「鐵線」の名はテッセン節植物（あるいは *C. florida*）にあてられた中国古来の植物名であったと考えられ，饒州あたりではこの名称で通用していたのであろう．威霊仙と別項に記されたのは医を専業としなかった蘇頌がこのことを認識していなかったからであろう．同様のことは「鈎藤」についてもいえる[33]．

IV. 「威霊仙」が中国へ伝えられた年代について

威霊仙は本草書としては『開宝本草』[4]に初収載された薬物であるが，『図経本草』[4]には「唐正元（貞元の誤り[36]，AD. 785～805）中」に書かれた『威霊仙伝』のことが引用され（Fig. 1），唐慎微[4]は『唐本』[37]や『崔氏海上集験方』[39]を引用していることから，中国では唐代の中頃にはすでに用いられていたことは明確である．また唐慎微は『千金方』をも引用しているが，現在に伝わる孫思邈の『千金要方』[41]には「威霊仙」の名称は見られず，出典不明である．ただし『隋書経籍志』[42]に范世英『千金方三巻』が収載され，また『唐書芸文志』[15]には同書と孫思邈『千金方三十巻』が記され，いずれを引用したのか不明である．共に現在では原本が失われしまっており詳細はわからないが，もし前者を引用したとすると威霊仙は隋代から使用されていたことになる．

一方，威霊仙を中国に伝えた新羅僧に関してであるが，新羅の歴史は紀元前57年に始まり，926年まで続いている．この間，5世紀の中頃から7世紀の中頃（新羅の朝鮮半島統一）に至る約200年の間に新羅は盛んに中国文明の吸収に務めており，この間に多くの学問僧が中国あるいは中国を横断してインドへ渡ったと考えられる．ただ半島統一以後，新羅は独自の文化を築き上げており，医薬に関する知識もこの時期に新羅独特のものが確立され，威霊仙もその中の1種であったのかも知れない．この場合には，中国へ威霊仙を伝えた新羅僧は7世紀後半以後の人ということになる．

以上のことから判断すると，威霊仙は早い場合には西暦600年前後，遅くても800年代の初期には中国へもたらされていたものと考えられ，とりわけ『崔氏海上集験方』が書かれる少し前，すなわち8世紀の後半と考えるのが適当であろう．

結　　論

中国で威霊仙が使用され始めたのは8世紀の頃と推察され，当時新羅からの学問僧が今の陝西省東南部で中国人に伝えたのがきっかけである．当時新羅で使用されていた威霊仙は，その分類地理学的に考えて，キンポウゲ科の *Clematis patens* MORR. et DECNE. カザグルマ[43]の根であった．本植物は朝鮮半島，中国東北部および日本に分布する種で，陝西省には自生がない．花は通常淡紫色で，花被は6～7枚で同属植物中では際立って大型である．ところで商州の山地でカザグルマを探し求めた新羅僧は，本植物に極めて良く似た植物を探し当てた．その植物は *Clematis* 属植物中のテッセン節（Sect. *Tessen*）の植物であったと考えられるが，現在の陝西省南部には該当する植物の分布が報告されておらず，極めてまれな植物か，あるいはもとより個体数が少なく，薬用あるいは花が美しいために好んで採集され，絶えてしまったものと考えられる．なおテッセン節以外の同属植物であったとも考えられるが，『開宝本草』に記された「平沢に生える」という文章，他に根がひげ根状を呈し，かつ外面が淡かっ色で，花被が大型で，生時茎が明確に方形にみえる同属植物が同地に分布していないことなどから，その可能性は少ない．ところで新羅僧がこの植物を探し当てた時，ちょうど花期であったか否かは不明であるが，もしそれが *Clematis florida* であり，白花が開いていたとしても，新羅僧は自国では花が淡紫色である旨を伝えたであろう．テッセン節植物は落葉性の蔓性木本で，蔓は太くならず，一見して草本に見える．茎には明らかな稜があり，一見して方形に見える．葉は数枚の小葉からなる羽状複葉が対生する．この植物学的特徴を『開宝本草』の編者が「茎方数葉相対花浅紫根生稠密歳久益繁」と記したものと考える．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Pharmacognosy

以上，威霊仙の古来の正品は朝鮮半島に産する *Clematis patens* カザグルマであると考察したが，中国で最初に用いられた植物は同植物の分布域を考えると他の近縁植物であったと考えられ，*C. florida* テッセンあるいは *C. courtoisii*, *C. cadmia* の3種の中の1種であったと考察しうる．

引用文献および注

1) 第5報：御影雅幸，難波恒雄，生薬，**37**，342(1983).

2) 日本薬学会第100年会（1980年4月，東京）で発表した一部.

3) a) 中国医学科学薬物研究所等編，『中薬志』，第2輯，第2巻，人民衛生出版社，北京，1979，p. 201；b) 中華人民共和国衛生部薬典委員会編，『中華人民共和国薬典』，1977年版，第1部，人民衛生出版社，北京，1978，p. 403；c) 江蘇新医学院編『中薬大辞典』，上海人民出版社，上海，1977，p. 1632.

4) 唐慎微等編著，『経史証類備急本草』：a) 艾晟増訂，『経史証類大観本草』，柯氏重校影印本，1904，巻12，6丁；b) 曹孝忠等奉勅撰，『政和新修経史証類備用本草』，晦明軒重輯刊本，人民衛生出版社影印，北京，1957，p. 263；c) 王継先等奉勅撰，『紹興校定経史証類備急本草』，龍谷大学図書館所蔵本，春陽堂影印，東京，1971，12巻，上；d) 烈節：『大観本草』[4a] 巻31，44丁.

5) a) 北京部隊后勤部衛生部等編，『北方常用中草薬手冊』，人民衛生出版社，北京，1971，p. 432（威霊仙），p. 416（斬竜剣）；b) 河北省革命委員会商業局医薬供応站等編，『河北中薬手冊』，科学出版社，北京，1970，p. 359；c) 河北省革命委員会衛生局等編，『河北中草薬』，河北人民出版社，1977，p. 484；d) 内蒙古自治区革命委員会衛生局編，『内蒙古中草薬』，内蒙古自治区人民出版社，1972，p. 452；e) 山東衛生幹部進修学院編著，『山東中薬』，山東人民出版社，済南経，1959，p. 49；f) 沈陽部隊后勤部衛生部編，『東北常用中草薬手冊』，遼寧省新華書店，1970，p. 271（威霊仙），p. 272（棉団鉄綫蓮），p. 274（鉄脚威霊仙），p. 513（斬竜剣）；g) 西蔵自治区革命委員会衛生局等編，『西蔵常用中草薬』，西蔵人民出版社，1971，p. 232；h) 山西省革命委員会衛生局主編，『山西中草薬』，山西人民出版社，1972，p. 152；i) 陝西省革命委員会衛生局商業局編，『陝西中草薬』，科学出版社，1971，p. 517（威霊仙），p. 33（秤杆升麻）；j) 甘粛省革命委員会衛生局編，『甘粛中草薬手冊』，甘粛人民出版社，1970，p. 308；k) 四川省中薬研究所編，『四川常用中草薬』，四川人民出版社，1971，p. 959（威霊仙），p. 69（銅脚霊仙）；l) 湖南中医学院等編，『湖南農村常用中草薬手冊』，湖南人民出版社，長沙，1970，p. 164；m) 浙江省革命委員会生産指揮組衛生局主編，『浙江民間常用草薬』，浙江人民出版社，1970，p. 58；n) 貴州省中医研究所編，『貴州草薬』，第2集，貴州人民出版社，1970，p. 404；o) 広州部隊后勤部衛生部編，『常用中草薬手冊』，人民衛生出版社，1969，p. 360；p) 広西壮族自治区革命委員会衛生管理服務站編，『広西中草薬』，第2冊，広西人民出版社，1970，p. 212；q) 湖北省革命委員会衛生局主編，『湖北中草薬志』，第1冊，湖北人民出版社，1978，p. 701；r) 福建省医葯研究所編，『福建薬物志』，福建人民出版社，1979，p. 104；s) 甘偉松，『台湾薬用植物誌』，国立中医薬研究所，台北，1959，p. 142.

6) a) T. Namba, M. Mikage, *Shoyakugaku Zasshi*, **37**, 307(1983); b) M. Mikage, T. Namba, *Shoyakugaku Zasshi* **37**, 317(1983); c) M. Mikage, T. Namba, *Shoyakugaku Zasshi*, **37**, 325 (1983); d) 御影雅幸，難波恒雄，生薬，**37**，334(1983).

7) 謝宗万編著，『中薬材品種論述』，上冊，上海科学技術出版社，上海，1964，p. 91.

8) 李家実，肖培根，薈之号，薬学学報，15(5)，288(1980).

9) 一部未発表.

10) a) 石戸谷勉，『北支那の薬草』，第3版，同人会，東京，1942，p. 38；b) T. Ishidoya, "Chinesische Drogen," II, Verlag des Pharmakologischen Instituts der Kaiserlichen Universität zu Keijo, Keijo, 1934, p. 104; c) 岡西為人等著，『東北之薬材』，国立中国医薬研究所，台北，1958，p. 385；d) 朝鮮総督府林業試験場編，"朝鮮産野生薬用植物"，林業試験場報告，第22号，1936，p. 96（威霊仙），p. 192（冷草）.

11) 貝原益軒著，白井光太郎等考註，『大和本草』，有明書房，東京，1975，p. 225.

12) 岡本一抱，『和語本草綱目』，春陽堂影印，東京，1965，上冊，p. 489.

13) 松岡玄達著，難波恒雄編集，『用薬須知』，漢方文献刊行会，大阪，1972，p. 75（威霊仙），p. 216（鉄線蓮）.

14) 木村康一等新注校定，『国訳本草綱目』，第6冊，春陽堂，東京，1974，p. 336.

15) 『新唐書』，芸文志第49，百納本24史，第21冊，台湾商務印書館，台北，1967，p. 16215（千金方），p. 16216（海上集験方）.

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Pharmacognosy

16) 歴史上の地名は臧勵龢等編，『中国古今地名大辞典』，商務印書館，1933，に依った．
17) S. J. Lee, "Korean Folk Medicine," Publishing Center of Seoul National University, Seoul, 1966, p. 128.
18) 難波恒雄，谿　忠人，薬史誌，4(2)，2(1969)；久保道徳，木村善行，難波恒雄，薬史誌，10(1,2)，34(1975)；難波恒雄，林　俊清，生薬，34，25(1980)．
19) 陳師文等編，『太平恵民和剤局方』，商務印書館香港分館，香港，1971，p. 5，12，13，15，16，22，26，86，142，151.
20) 中国科学院中国植物志編輯委員会，『中国植物志』，第67巻，第2分冊，科学出版社，北京，1979，p. 227 (*Veronicastrum*)，p. 248 (*V. sibiricum* (L. PENNELL).
21) 同属植物あるいは近縁の *Veronicastrum* 属植物中で，『図経本草』の威霊仙のごとく葉が輪生する種は本植物のみである．
22) M. Tamura, "Systema Clematidis Asiae Orientalis," Scientific Reports No. 4, Osaka University, Osaka, 1955, p. 43. なお中国植物誌[23]ではテッセン節 (Sect. *Tessen*) は Sect. *Viticella* DC. 中に入れられている．中国産 *Clematis* 属植物の中で Sect. *Tessen* に入る植物は，これらの内，*C. lanuginosa* LINDL., *C. patens* MORR. et DECNE., *C. longistyla* HAND.-MAZZ., *C. courtoisii* HAND.-MAZZ., *C. florida* THUNB. および *C. cadmia* BUCH.-HAM. ex WALL. の6種である．これらはすべて花被片が6～8枚で大型のものである．
23) 中国科学院中国植物志編集委員会，『中国植物志』，第28巻，科学出版社，北京，1980，p. 199.
24) 『政和本草』[45]では「朽」は「折」になっている．
25) 林羅山著，B. H. 日本語研究ぐるうぷ編，『新刊多識編』，寛永八年版，文化書房博文社影印，東京，1973，p. 95.
26) 遠藤元理著，難波恒雄編，『本草辨疑』，漢方文献刊行会，大阪，1971，p. 184.
27) 「フナバラ」はフナバラソウ *Cynanchum atratum* BUNGE と思われ，『馬医絵巻』[28]に「薬師草」として描かれた図も明らかに同植物である．ただ現在ではまれな植物で[29]，当時もよく似た同属植物がフナバラと称されていた可能性もある．
28) 西阿著，『馬医絵巻』，1267，河杉家蔵本，影印本，大和絵同好会刊．
29) 北村四郎，村田源，堀勝，『原色日本植物図鑑』，上，保育社，大阪，1973，p. 207.
30) 大神神社史料編修委員会編，『校注大同類聚方』，大神神社史料編修委員会，櫻井，1979，p. 13. ただしこの書物は当時のものを忠実に再現したものか否かは疑問で，現代に伝わっているものは江戸期における偽作ともいわれ，文献的には問題がある．
31) 陳淏子輯，『花鏡』，中華書局，北京，1956，p. 112.
32) 李時珍，『本草綱目』，校点本，人民衛生出版社，1977，第2冊，p. 1307.
33) 林ら[34]は『図経本草』に記された「鈎藤」はアカネ科の *Uncaria rhynchophylla* (MIQ.) JACKSON であるとしているが，同書の「本経外木蔓類」[4d]に記されている「烈節」はその図から明らかに同属植物である．なお難波[35]はこのものに *U. sinensis* (OLIV.) HAVIL をあてた．
34) 林俊清，難波恒雄，薬史誌，17(1)，30(1982)．
35) 唐慎微等編著，岡西為人，難波恒雄，李煥燊考訂，『経史証類大観本草』，国立中国医薬研究所，台北，1971，p. 43.
36) 唐代に正元の年号はなく，「正」と「貞」は同音，李時珍[32]は貞元と訂正している．
37) 唐慎微がここで引用した『唐本』は『新修本草』でないことは明確である．『宋史芸文志』[38]に孔志約の『唐本草』が記され，本書のことかも知れないが，また『新修本草』に異本があったのかも知れない．いずれにせよここでは唐代に書かれた書物とのみ解釈しておく．
38) 『宋史』，芸文第5，百納本24史第27冊，台湾商務印書館，台北，1967，p. 21419.
39) 著者の崔玄亮は西暦800年頃の人[40]．
40) 『旧唐書』，列伝巻115，百納本24史第20冊，台湾商務印書館，台北，1967，p. 15475.
41) 孫思邈，『備急千金要方』，宋刊本，人民衛生出版社影印，1955.
42) 『隋書』，経籍志，百納本24史第15冊，台湾商務印書館，台北，1967，p. 11625.
43) テッセン節植物の中で，朝鮮半島に分布するのは本種のみである．
44) 寇宗奭撰，『本草衍義』，武昌医館重刊本，1910，巻12，4丁．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Pharmacognosy

45) 王肯堂輯，『医統正脈全書』，新文豊出版，台北，1975，第12冊，p. 7902（湯液本草）；第13冊，p. 8921（丹渓心法）.
46) 劉文泰等奉勅撰，『本草品彙精要』，人民衛生出版社，北京，1964，p. 397.
47) 陳嘉謨撰，『本草蒙筌』，周氏仁寿堂刊，1573，巻2，19丁.
48) 呉儀洛撰，『本草従新』，上海衛生出版社，上海，1958，p. 134.
49) 黄宮繡，『本草求真』，上海科学技術出版社，上海，1959，p. 85.

NII-Electronic Library Service